

# 西遊記翻訳史における伊藤貴麿の位置

井 上 浩 一

## 要 旨

本稿は、岩波少年文庫『西遊記』の編訳者として知られる伊藤貴麿の訳業が、日本における西遊記翻訳史においてどのように位置づけられるかを述べたものである。伊藤は中国語で書かれた西遊記を初めて完訳した人物であると考えられているが、彼が翻訳に使用した西遊記は原典を児童向けに編纂したものであり、原典を翻訳したかのような評価は過大であると言わざるを得ない。しかし、日本における西遊記の受容が、江戸時代に訳されたダイジェスト本に拠る時代から、原典を翻訳する時代へ、あらすじを追う時代から、詳細な描写を味わう時代へと移り変わる為の「橋渡し役」としての功績を残したと言うことはできるのではないか。

キーワード： 西遊記／伊藤貴麿／翻訳／児童文学

## 1. はじめに

本稿は、伊藤貴麿（1893-1967）の編訳した西遊記（本稿では特定の書名の場合のみ『』をつけ、複数の書籍・版本の総称として用いる場合には『』を付けない）が、日本における西遊記翻訳史・受容史の中で、どのような位置にあり、どのような役割を果たしたのかを明らかにしようとするものである。

伊藤貴麿は、本名を利雄といい、神戸市の生まれ。旧制三高を中退した後、早大英文科を卒業している。雑誌『早稲田文学』『文藝春秋』『文芸時代』の同人として短編小説を発表し、1924年には作品集『カステラ』（春陽堂）を出版しているが、その後は児童文学を主たる活動分野とし、『赤い鳥』『童話』『童話文学』『児童文学』などの雑誌に再話や劇、創作童話などを発表、1936年に童話集『龍』を出版している<sup>1</sup>。しかし何と言っても伊藤の業績としては、中国の童話の翻訳、とりわけ西遊記の翻訳が、まず第一に挙げられる。例えば大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』（大日本図書1993年）の「伊藤貴麿」の項では、次の様に述べられている。

（伊藤は一九）三七年三月の「児童文学」廃刊後は、独学での中国文学研究を深め、四一年～四二年に呉承恩作『西遊記』上下二巻（童話春秋社刊。戦後の新版では同和春秋社刊）を翻訳出版した。戦後の五五年にも『西遊記』上中下三巻（岩波少年文庫）を刊行した。この岩波版『西遊記』は少年向きでない内容の一部を省略した抄訳とはいえ、伊藤の代表的訳著である<sup>2</sup>

このように、岩波少年文庫の『西遊記』を伊藤の代表的訳著とするのが、一般的な見方と言えるだろう。岩波少年文庫『西遊記』は現在でも刊行されており、1941-1942年に童話春秋社から出版された『新譯西遊記』から数えると、伊藤貴麿の西遊記は、既に70年にわたって読み継がれていることになる。参考までに、伊藤貴麿の手に成る児童書西遊記と、その一部を収録した本を以下に年代順に列挙しておく<sup>3</sup>。

- ・『新譯西遊記』上・下巻、童話春秋社、1941-1942年
- ・『西遊記物語：世界名作物語』童話春秋社、1949年
- ・『六年の世界名作読本』実業之日本社、1951年
- ・『西遊記物語』少年読物文庫、同和春秋社、1954年
- ・『西遊記』全三冊（岩波少年文庫90-92）、岩波書店、1955年
- ・『世界の文学 小学4年生』あかね書房、1957年（筆者未見）
- ・『中国童話集』（世界童話文学全集14）、講談社、1960年
- ・『三国志／西遊記』（世界名作全集1）、平凡社、1960年（大人向け）
- ・『少年少女世界の名作文学 44』（東洋編 3）、小学館、1965年
- ・『西遊記』（少年少女講談社文庫）、講談社、1979年
- ・『西遊記』全三冊（岩波少年文庫3023-3025）、岩波書店、1979年
- ・『月夜の電信柱』（中学生の文学4）ポプラ社、1984年
- ・『西遊記』全三冊（岩波少年文庫547-549）、岩波書店、2001年

## 2. 『新譯西遊記』の西遊記翻訳史における位置づけ

伊藤の西遊記翻訳史における功績を述べる際、伊藤が「西遊記の完訳を初めて行った人物」であるという言い方がなされることがある。例えば、雑誌『日本児童文学』（河出書房新社）の1968年3月号には伊藤貴麿の追悼特集が組まれているが、そこに掲載された追悼文では、「『西遊記』の最初の完訳をはじめ、数多の業績によって、先生のこの方面の先覚者としての地位は不動のものでありました<sup>4</sup>とか、「伊藤君は、西遊記の、原本通りに完訳したものが無い事を嘆いていましたが、やがて自分の手でそれを果たされました<sup>5</sup>と述べられている。つまり、伊藤が西遊記を原本通りに完訳した最初の人物であるとしているのだが、もしそれが正しいとすると、童話春秋社『新譯西遊記』（1941-1942年、以下『新訳』と略称）が日本における西遊記の最初の完訳ということになる。

確かに、日本でそれまで読まれてきた西遊記は『画本西遊全伝』とその翻刻本、及びそれをアレンジして書かれたものが多く、管見の限りにおいて、伊藤以前に西遊記を原本から完訳したものは見られない。『画本西遊全伝』全四編（以下『画本』）は、1758-1831年にかけて刊行された西遊記の翻訳書『通俗西遊記』全五編（以下『通俗』）をダイジェストした改訳本で、初編は1806年に石田尚友に、二編は1827年に山田圭蔵によって書かれ、三編と四編は、それぞれ1835年と1837年に岳亭丘山によって翻訳されたものである。西遊記全100回のうち、『通俗』では第65回までしか翻訳さ

れなかったのに対し、『画本』は文章をダイジェストしつつも西遊記全100回を全て訳している。『通俗』第五編の訳者は、『画本』第三・四編の訳者と同じ岳亭丘山であり、『通俗』の訳業は『画本』の刊行に吸収される形で終わってしまったと見られている<sup>6</sup>。その後、『画本』は『絵本西遊記』、『画本西遊記』『西遊記』などのタイトルで、博文堂(1896年)、吉川弘文館(1910-1911年)、有朋堂(1926年)などの出版社から活字本として翻刻され、とりわけ博文堂の帝国文庫に収められたことによって、大正から昭和にかけて、「わが国に於ける西遊記の代表的地位を獲得」し、当時の日本の西遊記の「ほとんどが画本に拠っている」ことが先行研究でも指摘されている<sup>7</sup>。

例えば、児童書西遊記を数多く刊行し「宇野の『西遊記』は、戦前戦後の半世紀以上にわたって読みつがれ、息長くその物語の流布浸透に貢献してきた類希な作といえる」<sup>8</sup>と評される宇野浩二(1891-1961)も、少なくとも1945年以前に西遊記を編纂した際、中国語で書かれた原典には当たっていない。それは、西遊記について触れた書簡の中で、「『西遊記』の原作は日本語で読めるものとは大へん形式がちがふさうですが」<sup>9</sup>と伝聞の形で書いていることから明白である。そして彼の西遊記は、そのほとんどが1945年以前に書かれたものか、それらを少し手直しして再出版されたものである<sup>10</sup>。おそらく彼も『画本』に拠って西遊記を書いた一人なのだろう。宇野のように、原本を読んでいない、あるいは経歴から見て原本から翻訳はしていないであろう人物が児童書西遊記を書いているという例は、巖谷小波(1970-1933)、中島孤島(1878-1946)など枚挙に暇がない。そしてその多くが『画本』に拠ったと考えられている。

もちろん日本において伊藤貴麿以前に児童書西遊記を書いた者の全てが中国語を読めず、『画本』に拠った訳ではない。中には中国語が読める者もいたし、『画本』に無い場面が書かれている児童書西遊記も存在する。しかし、そのような西遊記は、結果として最後まで訳し通せておらず、「完訳」とはなっていないようなのである。

例えば、作家の佐藤春夫(1892-1964)は、『平妖伝』(改造社、1929年)や『好逑伝』(奥川書房、1942年)など中国小説の訳書を出版しており、中国小説の翻訳が可能な人物である。そして彼は伊藤に先んじて1940年に『西遊記』(新潮社)も出版している。この本には『画本』に無い場面も収録されていることから、原本に拠って翻訳されたものと考えられるが、猪八戒が登場した場面で次の様に述べて打ち切られており、最後まで訳されてはいない。

孫悟空の主役になっているのはじめの部分は、人間の少年時代を書いたもので、それだから子どもにおもしろく有益な教えが多いのだが、猪八戒が主役になると、人間のこども時代からぼつぼつはなれてしまうから、子どもにはわからぬことが多くなりすぎる。無理にわからせてみてもむだだと思ふから、これ以上西遊記を書きつづけることは、もうこれでやめようと思ふ。

西遊記は百回ある大がかりな小説で、今までのところはそのうちのまだ十六回ぐらゐまでであるから、今までの調子でおしまひまで書きつづけると、おしまひになるには何年かゝるかわからないから、ひとまづやめるのである(中略)原文の西遊記は支那の俗語などが多くてなかなかむづかしいから、わたくしもほんたうによくは読めないのです。いや現代の支那にも、十分

読める人はすくないのではないかと思います。諸君が大きくなって自分でこれを読みこなしたら、話はもつともつとおもしろく意味も深いのです。どうぞ勉強して読めるやうになつてください<sup>11</sup>

佐藤は、自分が打ち切った以降の内容が子供向けでは無いことを主たる中止の理由としつつ、同時に原文の難しさを述べ、自分が原文を十分に読めない事を告白している。西遊記の原文を翻訳する事が難しいのは事実で、伊藤よりも後の1949年に、安藤更生と小杉一雄が『全訳西遊記』全四冊（富国出版社）を刊行しているが、「全訳」と銘打っているにもかかわらず、これも結局は『西遊記』全100回のうち、第77回で終わってしまっている<sup>12</sup>。

以上は全て傍証に類するものではあるが、やはり伊藤が『新訳』を刊行する以前には、西遊記を完訳した書籍が存在しなかったか、もしくは仮に存在していたとしても人知れず失われたものと思われる。従って、少なくとも世間に知られたものとしては、伊藤の訳が「中国語で書かれた西遊記」を完訳した最初のものであると言って良い。

しかし、それによって『新訳』を、一般的な意味において「西遊記の最初の完訳」とすること、ましてや「原本通りに完訳」したとする事には、実は問題がある。なぜなら伊藤が翻訳に用いた底本は、明清小説の（すなわち「原本」の）西遊記そのものではない。伊藤は『新訳』の「はしがき」で、「本書は大體、方明といふ人の改編西遊記をもとし、他に二三の原書を参考として、あらたに組織的に譯出し<sup>13</sup>」たと明記しているが、ここで伊藤がいう方明の『改編西遊記』は、詳細は後述するが、1930年代に、当時上海にあった商務印書館から「小学生文庫」というシリーズの一つとして刊行されたもので、中国語で書かれてはいるものの、原本から多くの挿話を除いた児童向けの本である。従って、伊藤が西遊記の原本を翻訳したとする上記の見方に対しては、当然異論も少なくない。例えば、新島翠による以下の批判はその一例である。

伊藤氏は、子ども用に方明が改編した『西遊記』を訳されたのである。しかし、それが中国語で書かれたものであるため、子ども用に翻案されたものであるにもかかわらず、原典からの訳とするむきがあるのは残念である（中略）一例であるが、『児童文学事典』（東京書籍一九八八年）の伊藤貴麿氏の項には「独学による文学研究はこの間一層進み、初の全訳『西遊記』上・下（四一・四二）・・・中略、などに結実していく」と記されている。この記載には、何をもとに訳したのか具体的に記されていないため、中国語からの訳というだけで、原典からの全訳と誤解してしまうのではないだろうか。同様の記載は他の事典（井上注：注で『児童文化人名事典』日外アソシエーツ、1996年を掲げる）にも見られる<sup>14</sup>

この批判は、至極まっとうなもので、伊藤の西遊記は、確かに「中国語で書かれた西遊記」を全訳した最初のものとはいえるが、あくまでダイジェストされた児童書を翻訳したものであって、「原本」の訳ではない。「西遊記の全訳」と言った場合、一般には原本に拠った完訳を意味すると考えられ

ることから、伊藤を「西遊記を最初に全訳した人物」と評価することは、やはり妥当ではないと思われる。

### 3. 『新譯西遊記』の影響

これまで述べたとおり『新訳』を西遊記の本邦最初の完訳と見なすのは過大な評価と言わざるを得ない。しかし『新訳』は後の様々な翻訳に影響を与えており、その意味において功績は大きい。

まず、伊藤本人の「代表的訳著」である岩波少年文庫『西遊記』全三冊は、伊藤自身が「戦前に、その「改編西遊記」を、全訳したことがありましたので、その経験を生かして、こんどこの「西遊記」三巻を、編訳することにいたしました」<sup>15</sup>と述べているように、『新訳』の経験を生かして書かれた再訳であり、現在まで読み継がれている伊藤の「代表的訳著」は『新訳』という下地があったからこそ生まれたものということができるだろう。

次に、伊藤訳が他の翻訳者へ与えた影響として、1975年に福音館から刊行された君島久子による抄訳本など、原本（君島訳は原本の排印本である『西遊記』（人民文学出版社、1955年）を底本とする）を用いた児童書西遊記の刊行を促す働きがあったことが挙げられる。君島は自身の翻訳について書いた文章で、以下の様に述べている。

「『西遊記』の原典からの訳って、実に初めての快挙よ、がんばってね」まっ先に励ましてくれたのは、意外にも岩波の編集者、いぬいとみこさんだった。しかも岩波ではこれより以前に、少年文庫で伊藤貴麿訳「西遊記」を出版している。従来の子ども向けの断片的なものとは異なり、内容の一貫した三冊本だ。これに対して福音館のわたしの仕事は、強力なライバル的存在になるはずなのに…（中略）岩波の「西遊記」を訳された伊藤貴麿氏といえば、わたしにとっては、伊藤先生と呼びたい大切な存在だった。たぶん酒井朝彦氏のご紹介によると思うが、実によくして頂いた（中略）この本（井上注：方明の西遊記）に出合った時の喜びは察するに余りがある。翻訳が完了し、出版した一九四一年暮れには、太平洋戦争が勃発している。世上騒然とした中であって、孜々として翻訳を続け完成された伊藤先生の姿勢は、見事である。当時の訳業が、戦後岩波少年文庫の「西遊記」として再び結実したことを喜びたい<sup>16</sup>

自分の手がける翻訳が伊藤訳の「強力なライバル的存在」になるという言葉には、君島の自負が垣間見られるが、逆に言えば、君島自身が伊藤訳の水準や影響力を認め、乗り越えるべき「目標」としていたことが窺えるのではないか。引用の後半では伊藤の翻訳に対する姿勢を称賛しており、原本に拠ったのではないにせよ、伊藤が完訳を成し遂げたことが刺激となり、これを越えるべく原本に挑んだのではないかと考えられる。

伊藤の訳業があたえた影響は児童書のみにとどまらない。原本の完訳を最初に成し遂げたのは、太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』全二冊（中国古典文学全集13・14、平凡社、1960年）であるが、その「あとがき」で次の様に述べられている。

なお、最近の訳業としては、伊藤貴麿氏の「西遊記」(岩波少年文庫、昭和三十年)が挙げられる。序文によれば、方明なる人が西遊記を青少年向きに改編した「改編西遊記」なる書物をテキストとし、それを編訳したものだということである。伊藤氏はすでに知られているように、中国児童文学の専門家であるから訳筆もこなれており、わたしたちも部分的に参看して、訳語などにつき教えられるところがあった<sup>17</sup>

「部分的に参看」としているが、中国文学の専門家である太田・鳥居両氏が「教えられるところがあった」としている点は特筆に値しよう。また、伊藤はこの訳書の上巻の月報に「読「西遊記」妄談戯筆の序の口」という文章を載せており、おそらくは『新訳』や岩波少年文庫の訳業によって、西遊記翻訳の分野で一定の権威を得ていたであろうことが窺える。

以上、『新訳』が他の西遊記翻訳書に与えた影響を検討した。西遊記の本邦初の完訳とする評価は、その底本を考慮すると過大ではあるが、中国語で書かれた西遊記を完訳した『新訳』の出現が、『画本』に拠って西遊記が編まれていた時代から、原本から翻訳しようとする時代へと変化するための「橋渡し」の役割を果たしたと評価することは可能であろう。

#### 4. 方明『改編西遊記』について

前述した通り、伊藤の『新譯西遊記』は、当時上海にあった商務印書館から1933年から1937年にかけて刊行された「小学生文庫」の中の一つ、方明『改編西遊記』を翻訳したものである。伊藤は何故『画本』を用いた旧来の西遊記に飽き足らず、この本を用いたのだろうか。それを明らかにするために、方明が改編した西遊記とはどのようなものなのかを、ここで見ておきたい。方明の西遊記には「改編者話」という文章があり、この本の編集方針について以下の様に述べる。

西遊記というこの本は、子供の心理とイマジネーションにとっても合っており、昔の子供でも今の子供でも、読むのが嫌いな人はとても少ないだろうと、私は信じています。しかし、原本の西遊記には、低俗な材料がたくさん有り、とても簡単に子供に良くない影響を与えてしまいます。近頃この点に気づいた人が有り、書中の面白いストーリーを抜き出して、簡単に短いお話にまとめました。このような仕事はとても必要なものではありませんが、子供達はそのような再編作品をあまり歓迎していないようです。それはなぜでしょうか？ 私個人の意見に拠れば、おそらく再編された作品は、ただストーリーを述べることに重きを置いて、多くの描写を欠いてしまったからではないでしょうか。たとえば原書では孫行者のずるがしこさや、猪八戒の愚鈍で冗談好きなどが描写されていますが、とても生き生きして楽しく、子供たちが最も好んで読むところでもあります。ほかにも激烈な闘いの場面や、様々な愉快な文章が、再編された作品では簡略化されていて、子供たちが楽しむのには物足りないのです。ですから、私は西遊記をバラバラにして再編するよりは、むしろ全体的に改編することにしました。改編する時

には以下の幾つかの点に注意しています。(一) 原書の描写を保存すること。(二) 子供が読むのにふさわしくない原書のストーリーは削除すること。(三) ストーリーのつながりに注意すること。(四) 一律に現代式の句読点を付け加えること<sup>18</sup>

方明が改編する際に注意したという四点のうち、(二)については、それまでの再編本が、西遊記の持つ「良くない影響」に気づいた人によるものだとすれば、当然すでに注意が払われていたはずである。(三)については明確な記述が無いが、それまでの再編本は「ストーリーを述べることをみを重視して」いるぐらいであるから、やはりストーリーのつながりにもそれなりに注意は払われていたであろう。また(四)は内容に関する事ではなく形式的なことである。つまり内容について言えば(一)の「原書の描写の面白さを保存」するよう心がけて改編した点こそが、それまでの児童向け西遊記と最も異なる点なのだと考えられる。

## 5. 画本の欠点と『新訳』の特長

一方、伊藤の『新訳』は、それまで日本で読まれていた諸本とは、どのように異なるのか。伊藤は当時多くの諸本が基づいていた『画本』の欠点と『新訳』の特長について「はしがき」で次の様に述べている。

この譯書（井上注：『画本』を指す）は、後、博文館の帝國文庫や、有朋堂文庫や、葵文庫などに收められて活字本となり、一番廣く吾人にしたしまれ、從來は西遊記とさへ言へば、本書にかざられた觀があつたのであります。が、實は本書は、量にして全體の四分の一くらゐの甚しい抄譯本で、これを以てしては、原作の一般をうかがふに足るものであるとは、言ひ難いのであります。最近他に二三、別に譯されたものも出ましたが、やはり一層甚しい抄譯であり、殊に少年讀物のそれに至つては、實に翩翩たるものに過ぎませんでした（中略）支那に於ては、西遊記は、今でも大衆に一番人氣のある作であると同時に、また文學作品としても、甚だ高級なものであります。その一つの要素として、魯迅や林語堂も言つてゐるやうに、支那文學には珍しい、豊富な幽默や高級な諧謔に充ちてゐるからであります。元來この作は、全體の六七十パーセント迄は、會話體になつてゐるもので、幽默や諧謔はその間に織込まれてゐるのですが、舊譯書に於ては、餘りに量を壓縮せんとしたために、會話體を短い筋書的な説明文にかへてしまつたので、幽默や諧謔等は全部失はれてしまつてゐます。

私はこの度新しく本書を譯出するにあつて、いさゝかでも舊譯書の缺を補はんと期し、量に於ては、ほゞこの大作の全般をうかがふに足るだけの分量とし、なるべく會話體を存し、未譯の多くの個所を加へ、全篇至る所に出て来る、聖人の格言や、興趣ある俗諺の多くを採り入れることに致しました。それで、以前に邦譯の西遊記を読まれた方でも、も一度本書を繙いて、— 實は西遊記とは、こんなに内容の豊富なものであつたか、・・・と西遊記觀を一新して下さる方が數人でもあれば、私の満足はこれに過ぎないのであります<sup>19</sup>

ここで伊藤は、『画本』は「筋書」で、会話の描写が欠けており、その結果ユーモアや諧謔が失われてしまっているため、自分の本ではそれを補おうとしたと主張している<sup>20</sup>。『画本』の欠点を補うという目的に合致する本を探していて方明の改編本に出会ったのか、方明の編纂方針を読んで日本で通行する『画本』にも中国の児童向け西遊記と同じ欠点があることに気づいて方明改編本を採用したのかは不明だが、西遊記の面白さは細部にこそ存在し、もし児童書西遊記を編纂するのであればそれを省略することなく編纂すべきだ、とする点において、方明の方針と『新訳』の方針が一致していることは間違いない。

## 6. 『画本』と『新訳』の内容

実際に『画本』と『新訳』の内容を比較してみると、目次だけを見れば『画本』は原本の挿話をほとんど全て採録しており<sup>21</sup>、その点では一部の挿話が削除されている『新訳』よりも内容が豊富であるかのように見えるが、各挿話の中に描かれている場面を確認してみると、『新訳』には、『画本』に見られない場面が収録されていることがわかる。

例えば、原本(第5回)や『画本』(初編巻2)では「乱蟠桃大聖偷丹(蟠桃を乱し大聖丹を偷む)」、『新訳』(第5回)では「蟠桃会を擾乱す」という題目になっている挿話がある。これは、孫悟空が「齐天大聖」を名乗ることを玉帝に認められ、天界の蟠桃園の番人となったある日、仙女たちから蟠桃会という宴会が開かれることを聞き、様子を見に行ったところ、つい会場の酒を飲み、太上老君の金丹を盗み食いしてしまい、花果山へ逃げ帰るという話である。その中に、蟠桃会の会場へ向かった悟空が、途中赤脚大仙に出会ったので、これを奇貨とし、大仙を騙して他所に行かせ、自分は大仙に化けて会場に忍び込むという場面があり、『新訳』では以下の様に描写されている。

それから悟空は雲を起し、園内を跳り出し、瑤池(天宮の御苑にある池)へと急いで行きますと、途中でばつたり赤脚大仙に遭つてしまひました。悟空は、こは、うるさし——と心に思ひましたが、さあらぬ體で、「大仙、いづこへ參られます。」と問ひかけると、「招かれて、瑤池の蟠桃會に參りますぢや。」と大仙が答へたので、悟空は一計を案じ、「この度は例年と違つて、通明殿で儀式をあげてから、瑤池に參ることになりました。それがしの筋斗雲が疾いものですから、今皆様にお知らせに參るところです。」といつはると、大仙は、正直な人でしたから、悟空の言葉を信じ、「ほほう、それでは、通明殿の方へ參りませうわい。」と方向を轉じて、通明殿の方へ行つてしまひました。 / 悟空はしすましたりと 雲に乗つたまゝ、咒文を唱へて身をひと搖りゆると、たちまち赤脚大仙の姿に變じ、瑤池の寶閣(瑤池に臨みし廣間のある御殿)に來り、雲から降りて、そつと寶閣のなかへとはいつて行きました<sup>22</sup>

しかし、『画本』ではこの一段がすっかり削除されてしまっているのである。

また、蟠桃会の会場を荒らした後、悟空は、自分のしたことが恐ろしくなり、天界から逃げ出して花果山に帰るが、原作及び『新訳』では、その後もう一度こっそり天界に戻る場面がある。『新訳』

ではこれを以下の様に描写する。

大勢の者はこれ（井上注：悟空が花果山に帰ったいきさつ）を聞いて、大聖を慰めようと、酒や果物を列べ、果酒を大盃になみなみとついで捧げました。悟空は、一口飲んでみて、べつべつと舌うちして言ひました。「これはまづい、まづい！」／すると傍の一匹が、「大聖様は天宮にあつて、仙酒を飲んでられたから、この果酒がお口に合はないのでせう。しかし諺に『うまくもまづくも、故郷の水』と申すではございせんか。」と言ふと、悟空は笑つて、「お前達はそれでは『親類であつてもなくても、故郷の人』か。」とたはむれ、それから又、「瑤池の寶閣の、あの長廊下に、仙酒が幾甕もあつたが、あんなよい酒はお前達は皆飲んだこともなからう。おれはも一度行つて、幾甕か偷んで来て、お前達皆に、たとひ半杯づゝでも飲ましてやらう。さうすれば皆長生するからな。」と言つて、喜ぶ家来どもを残し、再び洞門を出て行きました。／さて彼は、觔斗雲に乗り、隱身の法を使つて、瑤池の蟠桃會の會場へと来てみると、先に睡り虫に取附かれた役人どもは、まだぐうぐう睡つてゐましたので、彼は大甕二個を脇ばさみ、なほ二個を両手に提げて、雲をめぐらして難なく歸り着き、洞中に大勢の猿どもを集めて、『仙酒會』を開いて、みんなで幾杯かを飲み合ひました<sup>23</sup>

しかし、この場面も『画本』には見られない。

つまり、『画本』は挿話の根幹を成す場面は残しているものの、ストーリーの大きな流れに影響しない、枝葉となる場面は削除しているのである。しかし、上に引用したように、削除された箇所も西遊記独特のユーモアにあふれた場面であり、失われてしまうのを惜しむ気持ちも確かに理解できる。方明の改編本及び『新訳』はそれを取り戻したのである。

また『新訳』は、文章も『画本』に比してかなり詳細である。例えば孫悟空が東海龍王の宮殿で如意金箍棒を手に入れた後、衣装も譲り受けようとする場面があるが、この場面の『画本』と『新訳』の文章を比較すると次の表ようになる。これを見れば、描写、特に会話の分量が両者の間で全く異なり、いかに『新訳』が詳細であるかは、一目瞭然である。

| 『絵本西遊記』（帝国文庫、1896年）<br>初編巻二 P.11 | 『新譯西遊記』上（童話春秋社、1941年）<br>P.42－46   |
|----------------------------------|--|
| 悟空是を聞て大きによこび猶甲やあるあたへ候得と請ふにまかせ、   | 悟空は寶ものを手にして、水晶宮の殿上にどつかと坐り、龍王に對して笑つて話しかけました。「御厚意は十分感謝いたします。」<br>「どういたしまして。」<br>「この鐵棒は素晴らしいものですが、もう一言申したい事があります。」<br>「この上未だおつしやり度いこととは。」<br>「この鐵棒がなかつた時は、これ迄通りですみましたが、今こんな立派な武器が手に入つたからは、それ相當の衣類も欲 |

|  |   |
|--|---|
|  | <p>しくなります。もし禮装の類でも御座らば、一件賜はりたいものでござる。」</p> <p>「そんな物は生憎ございません。」</p> <p>悟空は押強く言ひました。「ことわざに『一客二主を犯さず。』（獨力にて全部調達せられたしの意。）といふことがあります。もし無いとあれば、それがしは此の場を動きませんぞ！」</p> <p>「貴殿が他の海へでも行つて、お捜しになれば、あるひは有るかもしれません。」</p> <p>「『三家に走るは、一家に坐するに如かず。』（三軒走廻るより、一軒に坐込んでゐる方がよいの意。）と申しますぞ。どうあつても貴殿に賜はり度いもので御座る。」</p> <p>「御所望の品はござりません。あれば早速にも差上げますが。」</p> <p>「さあ、まだ無いなど、申して、この鐵棒を喰ひ度いか！」</p> <p>悟空は怒り出しかう叫ぶと、龍王は慌て、言ひました。</p> <p>「まあまあ、お静まり下さい。舍弟の所に言つてやつて、もしあれば、差し上げませう。」</p> <p>「令弟はいづこにをられるか。」</p> <p>「舍弟は、南海の龍王敖欽と、北海の龍王敖順と、西海の龍王敖閏との三人です。」</p> <p>「この我輩は、斷じて参りませんぞ！ 諺に、あやふやな三つより、確かな二つ——と申しますからな。何卒貴殿から、申し付けて戴きたいもので御座る。」</p> <p>「上仙はおいでの必要はありません。こゝに一つの鐵鼓と、金鐘とがありますが、火急の場合は、鼓を打ちたゝき、鐘を撞きならしますと、舍弟らは、即刻馳せつけて参りますから。」</p> <p>「しからは、早速、太鼓や鐘を打鳴らして戴きたい。」</p> <p>そこで、海の眷屬どもをやり、鐘を撞き、鼓を打鳴らせました。暫らくして、その響が遠くへ達しますと、果して三海の龍王達は、すはとばかりに立ち上り、一齊に殺到して來て、宮殿の外に相會しました。</p> <p>二番目の弟の敖欽が言ひました。「兄さん、鐘など鳴らして、どんな大事が出來たんですか。」</p> <p>龍王は説明して言ひました。「弟よ！ 困つたことが出來たわい！ 今朝、花果山の天生聖人なにかしと言ふ者が参つて、鄰人のよしみだといつて、一個の武器を求めたので、九股叉をあたへると、小さ過ぎるといふし、方天戟を與へると、輕過ぎるなど、申すのぢや。とうとう、あの大禹の寶柱を、自分で引きずり出し、今なほ宮中で頑張つて、またまた衣類までもよこせとたつて申すが、わしの處にはそんな物はないので、鐘を鳴らして、お前達を呼んだのぢや。お前達に相當の品が何かあれば、一揃與へて、歸してしまつたらどうだらう。」</p> <p>敖欽はかう聞くと、大いに怒つて言ひました。「何を無體な！ 我々が兵を起して、引つ捕へてしまつたらどうです。」</p> <p>龍王は押しとゝめて、「先づ、先づ、起兵は待て！ あの寶柱をぶんぶん振廻されては、徒に死人、怪我人の山をきづくばかりぢや。」</p> <p>そこで一番末の敖閏が、言葉をさしはさみました。「二番目</p> |
|--|---|

|   |  |
|---|--|
| <p>藕絲歩雲の履一雙、</p> <p>鎖子黄金の甲一副、</p> <p>鳳翅紫金の冠一頂をとり出してあたへければ、</p> <p>悟空よろこぶこと斜ならず。終に龍王に別れを告げ、水簾洞へ歸りける。</p> | <p>の兄さんのやうに、兵を動かすのはよくありません。一旦、衣裳や冠り物などを與へて置いて、彼を門の外に閉め出してしまつてから、書を以て天帝に上奏して、天誅を下していただければ如何です。」</p> <p>北海龍王の教順も言ひました。「それはよい考へです。わたくしはこゝに、一雙の藕絲歩雲履（藕の糸で編んだ、仙人の履）を持つてゐます。」</p> <p>すると、西海龍王も、「わたくしも、一つの鎖子黄金甲（鎖あみの金のよろひ）を持つてゐます。」</p> <p>と言ひ、遂に氣の荒い南海龍王も、「それがしも、一個の鳳翅紫金冠（鳳の翅をかざつた赤銅の冠）を所持いたしてをる。」</p> <p>と皆々言へば、兄の龍王は大いに喜んで、水晶宮に入つて、三人を悟空に引合はせ、それぞれの寶物を、差し出しました。そこで悟空は、金冠、金甲、雲履を、それぞれ身に着け、如意金箍棒を打振つて、悠々と立ち 去るにつき、又改めて龍王達に言ひました。</p> <p>「どうもとんだ大騒ぎをさせて、相すまなんだう！」</p> |
|---|--|

## 7. 他の翻訳書への影響 — 宇野浩二を例に

次に、これまで述べた様な『新訳』の「詳細な描写」が、他の児童書西遊記の作者にもたらした影響を見ておきたい。

宇野浩二は『蔵の中』（1919年）・『苦の世界』（1919-20年）などで知られる作家であるが、前述のとおり、日本の児童書西遊記の世界においても重要な人物の一人とされている。彼は、16点以上にのぼる児童書西遊記を刊行しているが、実はその多くは、雑誌『童話』（コドモ社）に、1920年から1923年まで連載された「西遊記」と、1927年に刊行された『西遊記・水滸伝物語』（アルス、日本児童文庫36）とを、出版社やシリーズを変えて繰り返し出版したものであった<sup>24</sup>。宇野浩二にとって、西遊記を含む児童書の刊行は、「文学的表現を失わずに生活費を支える手段」<sup>25</sup>という一面を持っており、一度書いたものに多少手を入れるだけで何度も出版できたことが、彼の文筆生活の経済面をしばしば支えていたと想像できる。ところが、1960年に刊行した『西遊記』（講談社、少年少女世界名作全集27）は、それまで彼が繰り返し刊行した児童書西遊記とは構成が異なるだけではなく、文章もより詳細なものとなっている。例えば次の表は、1932年に春陽堂文庫36・37として刊行された『西遊記物語』と、上述の1960年の『西遊記』の文章（孫悟空が天の役人になるものの、身分の低い弼馬温の役を与えられ、腹を立てて花果山に帰る場面）を比較したものである。1960年版には、1932年版には無かった場面が加えられ、記述もいくらか詳細になっていることが見て取れるであろう。

| 『西遊記物語』前篇(春陽堂文庫36、1932年)<br>P.19-20   | 『西遊記』(講談社、1960年)<br>P.45-49   |
|---|---|
| <p>悟空は、根が正直者ですから、役目を與へるなどと言つて、上天から迎へに來られて見ますと、すっかり喜んで、太白星に連れられて天に上りました。</p> <p>靈宵殿といふ御殿で始めて玉帝にお目通りして、弼馬溫といふ役目を言ひ付かりました。ところが、これは實は厩の番人 といった様な、ごく卑しい役目なのでした。</p> <p>悟空は始めのうちは何にも知りませんが、誰からとなくその事を耳にしますと、これまた正直者の常として、眞赤になつて怒りました。そして例の如意棒を耳の穴から出して、それを勢よく振り廻し振り廻し、南天門を飛び出して、觔斗雲に飛び乗つて、瞬く間に水簾洞に歸り着くなり、手下の者を呼び集めて、上天での模様を話し、<br/>『皆の者、さういふ譯だから、いつ何時攻めて來るかも知れない、十分用意をせよ。』と言ひ付けました。</p> | <p>孫悟空は、はるばる天の宮殿からむかえにきたときくと、それみろとばかり、大とくいで、「おい、みんな、るすをたのんだよ。」と、さっそく觔斗雲にのつて天へのぼっていきましました。ところが、もともとせっかちなうえに、觔斗雲はすばらしく早いので、太白星をうしろにおいてきぼりにしたまま、さきに天の宮殿の南門についてしまいました。 / すると、門をまもっていたおおぜいの兵隊が、ほこや、やりをきめかせながら、「やあ、あやしいやつ。」と、ばらばらとかけよつて、孫悟空をとりまきました。 / 旗やたいこで、にぎやかにでむかえてくれるものと思っていたのに、あてがはずれた悟空は、大むくれにむくれて、「さては、太白星じいに、いっばいくわされたか。」と、れいの如意ほうをとりだして、門をたたきやぶつて通ろうとするところへ、はあはあ息をきらせて追いついた太白星が、「まあ、まあ、おちついてください。玉帝のおよびだしがあつただけで、あなたは、まだ正式に天の宮殿にはいる手つづきがすんではないのだから、門番がとがめるのも、むりはないのです。」という</p> <p>と、悟空はてれくさそうに、「ええい、正式だの、手つづきだのとめんどくさい。」といいながら、太白星のあとについて門をはいつていきますと、さすがは天の宮殿です。金銀の屋根、はしら、石だと、目もくらむばかりのきらびやかさです。 / やがて、ひときわうつくしい御殿に進みますと、はるか正面のすだれごしに、「仙人の道をきわめたというのは、そのほうか。」と、すずしい声がかかりました。 / 「ああ、おれだよ。」悟空は、立ったままで、おじぎもしません。 / 「この山ざるめ、礼儀を知らないのものにもほどがある。」と、いならぶ天の大臣たちが、いきりたつのを、「かまうな、かまうな。このものに弼馬溫の役をさすけよ。」ふたたび玉帝の声がかかりました。 / 「へへえ。」と、みんながかしこまつておじぎをしたので、悟空も、なんのことかわからないながら、「ありがとう。」といつて、ぺこりと頭をさげました。 / 御殿をさがつてきてから、ひとりの役人をつかまえて、「弼馬溫って役は、いったい、なんだね。」とたずねると、「なんでもありませんや、うま屋の番人でさ。」というこたえです。 / これをきくと、悟空は、たいへんおこつて、頭からゆげをだして、「いやしくも花果山では、王さまとあがめられているおれを、よくも、うま屋の番人にしやがつたな。」というなり、つくえをけとばし、耳の中からとりだした、れいの如意ほうをふりまわしながら、南門をとびだすと、さっさと、水簾洞に帰つてきてしまいました。 / そうして、けらひを集めると、天の宮殿のできごとを話し、「そういうわけだから、いつ、天からせめてくるかもしれない。じゅうぶんよういをせよ。」といいわたしました。</p> |

1960年は宇野が没する前年であり、その前年から体調は思わしくなかったはずである<sup>26</sup>が、彼は

何故それまでのように過去の文章に簡単に手を入れて出版するのではなく、文章をより詳細にした新たな西遊記を一から作り直したのであろうか。

筆者は、伊藤貴麿の西遊記が原因（の少なくとも一つ）なのではないかと考えている。両者の西遊記における影響関係を直接示すものではないが、宇野の小説『芥川龍之介』下（文藝春秋社、1953年）に「芥川のところに出入りしていた、支那文学に通じている、伊藤貴麿」<sup>27</sup>と書かれていることから、少なくとも宇野と伊藤が知り合いで、宇野が伊藤のことを「支那文学に通じている」と認識していたことは明白であり、宇野が伊藤の西遊記を知らなかったとは考えにくい。従って、宇野は伊藤の詳細な場面描写をもつ西遊記に刺激されて、もしくは影響を受けて、描写を詳細にした新版の『西遊記』を刊行したと考えるのが自然であろう。もしそうだとすれば、宇野の1960年版『西遊記』は、詳細な会話の描写にこそ西遊記の魅力が有るとする伊藤の主張が、その翻訳を通して他の作者に伝わり、影響を与えた一例ということになる。伊藤の翻訳は、ストーリー以外の西遊記の魅力を読者（宇野のような作家も含めて）に伝えたという意味でも功績があると言えよう。

## 8. 小結 —— 伊藤貴麿西遊記の意義

これまで述べた内容をまとめると、伊藤貴麿の手に成った西遊記には以下のような意義があったと考えられる。

1. 中国語で書かれた西遊記を（改編された児童書とはいえ）完訳したことで、原典西遊記の翻訳を促す役割を果たした。
2. 西遊記のあらすじは、画本西遊全伝や、それを改編した諸本によって、それまでも知られていたが、伊藤の訳によって、それらの諸本では省略されていた細かな描写や会話、ストーリーの大きな流れに影響しないようなちょっとした場面の面白さも知られるようになった。
3. 2によって、西遊記は、話の筋以外の部分も重視されることとなり、この点が他の翻訳者にも影響を与えた。

伊藤が訳したのは原典ではなく、改編された児童書であり、西遊記を初めて完訳した人物であるという評価は過大であると言わざるを得ないが、日本における西遊記の受容が、『画本』の改編に拠る時代から原典を翻訳する時代へと変化する為の、そして、あらすじを追う時代から詳細な描写を味わう時代へと変化する為の「橋渡し役」として、功績を残したとは言えるのではないだろうか。

## 注

- 1 日本児童文学会編『児童文学事典』（東京書籍、1988年）「伊藤貴麿」の項（宮崎芳彦）、及び大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』（大日本図書、1993年）「伊藤貴麿」の項（関英雄）を参照。
- 2 前掲『日本児童文学大事典』「伊藤貴麿」の項。ただし、この内容には二点ほど問題がある。一つは「独学での中国文学研究を深め」たとすること。「独学」という言葉の定義もよるが、伊藤は西遊記刊行以前の1926年に既に『今古奇観』（支那文学大観第11、支那文学大観刊行会）を、佐藤春夫（1892-1964）・今東光（1898-1977）らと共に著で翻訳している。従ってこの時に、翻訳陣のリーダーであり、その本に解題と注を付けた宮原民平（1884-1944）に何らかの指導を受けた可能性が高い。もう一つは伊藤の訳を「少年向きでない

容の一部を省略した抄訳」としていること。確かに伊藤訳の本では「少年向きでない内容の一部」が無くなっている。しかしそれは、後述するように、伊藤が底本を抄訳したからではなく、底本自体がすでに挿話を取捨選択したものだったからである。

- 3 ここでは書籍として刊行されたもののみを挙げたが、この他、旺文社『中学時代』(1951年1～3月号)など、雑誌に掲載した西遊記も存在する。
- 4 小出正吾・関英雄「弔辞」『日本児童文学』1968年3月号(河出書房新社)
- 5 千葉省三「伊藤君の思い出」『日本児童文学』1968年3月号(河出書房新社)
- 6 磯部彰「旅ゆく孫悟空 東アジアの西遊記」(塙書房、2011年)参照。
- 7 鳥居久靖「わが国に於ける西遊記の流行—書誌的に見たる—」(『天理大学学報』7-2、1955年)
- 8 堀誠「『西遊記』受容史の側面」(和漢比較文学叢書18『和漢比較文学の周辺』、1994年)
- 9 1945年4月23日、織田作之助に宛てた書簡。増田周子『宇野浩二書簡集』(和泉書院、作家の書簡と日記シリーズ1、2000年)に拠る。
- 10 宇野浩二が編纂した西遊記の種類や系統については、『アジア文化論研究』2(石川秀巳教授退官記念特集、2015年刊行予定)に掲載予定の「宇野浩二の児童書西遊記」参照。
- 11 佐藤春夫『西遊記』(新潮社、1940年。のち、少年少女世界名作文学全集23、1960年)
- 12 太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』下「あとがき」(中国古典文学全集14、平凡社、1960年)。また、前掲「わが国に於ける西遊記の流行—書誌的に見たる—」によれば、1939年から『大法輪』という雑誌において雲山閣道人「決定版新譯西遊記」という題で、原書からの翻訳連載が始められたらしいが(筆者未見)、やはり中絶したようである。
- 13 「はしがき」『新譯西遊記』上巻(童話春秋社 1941年)
- 14 新島翠「原典訳『西遊記』と商務印書館「小学生文庫」」(『中国児童文学』17、2007年)
- 15 「まえがき」『西遊記』上(岩波書店 岩波少年文庫90、1955年)
- 16 君島久子「『西遊記』—さまざまな出会い」(『中国児童文学』17、2007年)
- 17 前掲注12太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』下「あとがき」。
- 18 「改編者話」方明『改編西遊記』(増訂小学生文庫、台湾商務印書館、1966年)。伊藤が底本とした本ではなく、台湾商務印書館から「増訂」小学生文庫として刊行されたものを筆者が訳して引用した。もとの小学生文庫版は国立国会図書館国際子ども図書館に第6冊と第9冊のみ(どちらも途中まで)残っており、これを「増訂」と比較したところ、完全に一致したので、おそらく第1冊も同内容であろうと判断した。小学生文庫については注14に掲げた「原典訳『西遊記』と商務印書館「小学生文庫」」に詳しい。

なお、原文は以下の通り。

西遊記這部書很合兒童的心理和想像,我相信,無論過去的兒童及現在的兒童,很少不歡喜閱讀的。但是,原本的西遊記,有許多不雅訓的材料,很容易使兒童受到不良的影響。近來已有人注意到這點,摘取書中有趣的情節,編成簡短的故事,這種工作,很是需要,但是兒童們似乎不甚歡迎這種重述的作品,這是甚麼緣故?依我個人的意見,大概是因為在重述的作品中,只注重情節的敘述,而缺少了相當的描寫吧。例如原書描寫孫行者的刁鑽伶俐,豬八戒的笨拙和愛打諢,極為活潑可喜,兒童們也最愛閱讀,其他劇烈爭鬭的描寫,以及種種熱鬧的文字,在重述的作品中,類多簡略,不足以饜兒童們的欣賞。所以,我以為與其將西遊記作零碎的重述,毋甯作整個的改編。但是改編時應注意下列幾點:(一)要保存原書的描寫;(二)刪削原書不合兒童閱讀的情節;(三)要顧到情節的連絡;(四)要一律加新式標點符號。

19 前掲注13「はしがき」。

20 前掲「読「西遊記」妄談戲筆の序の口」でも『画本』とみられる「江戸時代の抄訳」について、「第一た

くさんの会話が殺してあるし、おもしろい所や、肝要な、それがあればその章が引き立つような大切な所が抜けている。また引用してある諺や俗言も抜けている。幽默もコッケイもあったものではない」とその簡略であることを批判している。

21 原本第55回は第54回と合わせて、画本第三編巻一に入れられている。

22 『新譯西遊記』上巻（童話春秋社 1941年）p. 78

23 同上 p.82

24 前掲注10参照。

25 渋川驍『宇野浩二論』（中央公論社、1974年）

26 注25『宇野浩二論』に、1959年には既に宇野は「病床で過すことが多くなった」とある。また、宇野自身同年6月12日に長沼弘毅にあてた書簡で「ひどい時は一と月に一枚といふやうな状態で、二年つづきの仕事を休んだり無理をしたりしつづけてゐます」と書いている（長沼弘毅『人間宇野浩二』講談社、1989年）。

27 宇野浩二『芥川竜之介』下巻（文藝春秋社 1953年）

〔付記〕本稿は科学研究費補助金研究「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」（基盤（B）23330075）による成果の一部である。